

『紅蓮のキャンバス』

作・演出 春田鮎



登場人物

蓮池 紵夢	(はすいけ えむ) : クロード・モネを愛する新鋭の画家
糸杉 輝馬	(いとすぎ てるま) : 絵夢の先輩画家
虹来 彩斗	(にじらい あやと) : 絵夢のライバル画家
草刈 礼音	(くさかり れのん) : 新鋭の画商
鬼海 司	(おにうみ つかさ) : 草刈に雇われた裏世界の男
猫間 伊織	(ねこまいおり) : 絵夢の熱烈なファン
豪内 世界	(ごううち せかい) : 絵画の収集家
葉山 露霧	(はやまろみお) : 男装の探偵
鹿島 龍樹	(かしまりゆうき) : 露霧の相棒
江口 慧	(えぐちけい) : 露霧の女好き

露澤N「俺たちはその日、ある依頼者に呼ばれて、指定された美術館に来ていた」

慧「いやー、美術館なんて久しぶりだなあ、な、露澤・・・露澤？」

露澤「うーん・・・さっぱりわからん」

慧「なにが？どこが分かんないの？」

露澤「慧・・・この絵、いつたい何が描いてあるんだ？」

慧「まつたくお前は芸術ってもんが全然分かってないんだからなあ。どれどれ？これはだな・・・むむむ、つまり、お前、あれだ・・・何だろうな？」

露澤「ほらみろ、偉そうなこと言って、やっぱりお前だつてわかんないんじやねえか」

慧「お、俺は古典が好きなの！こういう前衛的な抽象画はだな」

絵夢が近づいてくる。

絵夢「ははは、絵なんて好きに見ればいいんだよ」

露澤「え？」

絵夢「失礼。話が聞こえてきてしまつて、つい」

慧「詳しいんですか？絵」

絵夢「まあね、少しは。睡蓮は見たのかい？」

露澤「睡蓮？まだですけど、なんですか？睡蓮つて」

慧「あ！今回の展示の目玉なんですよね？マネでしたつけ？ムネ？ミネ？・・・」

絵夢「モネだよ（苦笑）」

露澤「ああ、入口にでつかく出てましたね」

絵夢「クロード・モネ、19世紀後半から20世紀初頭にフランスで活躍した偉大な画家さ。彼は250枚もの睡蓮を描いたんだ」

露澤「250枚も？」

慧「睡蓮だけを？」

露澤「美術館の方ですか？」

絵夢「いや、まあ、関係者といえば関係者かな。君たちは？絵画鑑賞に来たんじやないようだね」

露澤「するどい！待ち合わせしてるんです」

絵夢「ここで？」

慧「ええ。なんでも、紅い蓮の花を描いた紅蓮って作品の前で待つていてほしいって。どこなんだろ？」

絵夢「ああ、それだったらあっちにあるよ」

露澤「そうなんですか？ありがとうございます」

絵夢「案内しよう」

歩き出す絵夢。

露濱 「え？ あ、どうも」

慧 「絵描きさんかな？」

露濱 「さあな」

着いていく露濱と慧。

露濱 「どれだろう・・・あ、あれかな？」

慧 「あれだ。ほらここ」（説明書きを指さして）、紅蓮つて書いてある。し

かし、ずいぶん紅いな」

露濱 「なにに、えーと、睡蓮に触発され製作された作品。現代のクロード・モネの呼び名も高い画家、蓮池絵夢だつて」

慧 「写真があるぜ」

露濱 「本当だ・・・ん？ これ！」

慧 「あなた！」

絵夢 「ふざけてすまない。僕が君たちを呼んだんだ。蓮池です。よろしく」

露濱 「はあ」

慧 「どうも」

蓮池絵夢の個展会場。
盛況。ざわついている。

客A 「おめでとうございます」

絵夢 「ありがとうございます、ごゆっくり」

客B 「久しぶり、相変わらず、どれも素敵ねー」

絵夢 「お久しぶりです、あちらの絵もぜひ」

来客に挨拶する絵夢の元に、駆け寄る猫間伊織。

伊織 「あ、あの・・・蓮池絵夢さんですよね？」

絵夢 「そうだけど。君は？」

伊織 「突然すみません、僕、あなたの大ファンなんです。握手してください！」

絵夢 「別にいいよ。さあ」

伊織 「・・・感激だなあ、ありがとうございます」

そこに先輩画家の糸杉輝馬が現れる。

糸杉 「大盛況だな、絵夢」

絵夢 「あ、輝馬さん。来てくれたんですね、わざわざすみません」

糸杉 「当たきつての人気画家の個展だ、見逃すわけにはいかないからね」「そんな、僕なんかまだまだ」

糸杉 「しかし壯観だな。紅蓮の連作。大変だつたろう、何枚描いたんだ？」

絵夢 「32枚です」

糸杉 「すごいな・・・」

絵夢 「別に。ただ僕はモネに憧れて描き続けるだけですよ」

糸杉 「謙遜するな、お前の絵、すばらしいよ。特にあの」

伊織 「紅（あか）！ですかね？まるで燃える夕焼けの様な、はたまたみだらな唇の様な、でもやつぱり・・・したたる血の様な・・・僕はあの色が見たくて見たくて・・・今日で4日目です」

糸杉 「4日目？」

絵夢 「それじやあ、初日から通つてくれてるのかい？」

糸杉 「驚いたな、そんなに好きなんだ、絵夢の絵が」

伊織 「はい！夢にまで見てしまします・・・。先日の美術館で行われたクロード・モネの企画展にも行きました。モネの睡蓮と共に絵夢さんの紅蓮も展示されていて素晴らしかったです。だけど・・・」

糸杉 「どうしたんだい？」

伊織 「他にも蓮を描いたものが何点かあつて・・・邪魔でした。すぐ・・・」

糸杉 「おいおい、いくら絵夢の絵が好きだつて、企画展なんだから許してやれよ。おかしな子だな（苦笑）」

絵夢 「・・・ありがとう、ゆつくりしていって。君、名前は？」

糸杉 「ああ」

伊織 「・・・紅蓮は死の花・・・（立ち去る）」
糸杉 「え？・・・」

伊織 「ああ」
糸杉 「え？・・・」

そこに画商の草刈が近づいてくる。

草刈 「やあ、糸杉くんじやないですか？」

糸杉 「草刈さん・・・こんにちは、ご無沙汰します」

草刈 「昨年のあなたの個展以来ですかね」

糸杉 「・・・そうですね。あ、おめでとうございます。すごい人気ですね」

草刈 「ありがとうございます。絵夢もこれで、本当の意味で一流の画家の仲間入りが出来そうですよ」

糸杉 「ええ、本当に・・・」

草刈 「あ、紹介しよう。こちらは豪内世界さん。ご存知でしよう？豪内

グループ」

糸杉 「はい、知っています」

草刈「世界さんはその豪内グループの御曹司、ゆくゆくはグループを率いていく立場の方です。豪内家は旧財閥系で総資産は天文学的と言われています。そして絵画の蒐集では世界的に有名なんですよ」

豪内「やめてくださいよ、草刈さん。はじめまして、豪内です。糸杉さんの絵も時々雑誌などで拝見しています。是非今度、本物にお目にかかりたいものです」

草刈「いや、それはどうかな。糸杉さんは気に入られた客にしか絵を売らないんですよ。私など剣もほろろに断られ続けています。2年前もそうでした。彼は私が嫌いなんですよ」

輝馬「いや、そういうわけでは」

草刈「はははは、冗談ですよ、冗談。そうそう、豪内さんは絵夢の紅蓮がたいそうお気に召したようでしてね。モネほどとは言わないまでも、紅蓮の連作をすべて手に入れたいとおっしゃっている」

輝馬「本当ですか？」

豪内「はい。蓮池さんが、うんと言つてくださるなら」

輝馬「喜びますよ、彼も」

草刈「そうなれば、私も嬉しいですよ。ふふふ」

輝馬「・・・・・」

他の客と話している絵夢のところに、かつてはライバルだった虹来彩斗が現れる。

静まり返る会場。

絵夢「やめろ、彩斗！頼むから帰ってくれ」

彩斗「てめえ、人のこと騙して自分だけいい目見てよ、いまここで本当の事全部ぶちまけてやろうか？え？どうなんだよ！？」

絵夢「騙されたのは俺も同じだ・・・だが俺を逆恨みしたところで、時間

が戻るわけじゃないだろう？いい加減、あきらめろよ」

彩斗「ああ、そうかよ・・・わかつた、そつちがその気ならこつちにだつて考へが」

草刈「やめないか、みつともない」

彩斗「・・・草刈」

絵夢「彩斗！頼むから帰ってくれ」

彩斗「てめえ、人のこと騙して自分だけいい目見てよ、いまここで本当の

事全部ぶちまけてやろうか？え？どうなんだよ！？」

絵夢「騙されたのは俺も同じだ・・・だが俺を逆恨みしたところで、時間

が戻るわけじゃないだろう？いい加減、あきらめろよ」

彩斗「ああ、そうかよ・・・わかつた、そつちがその気ならこつちにだつて考へが」

草刈「やめないか、みつともない」

彩斗「・・・草刈」

草刈「お前こんな」としてただで済むと思つてゐるのか？私の画廊で好きな真似はさせないぞ。鬼海！この汚らわしいネズミを外に放り出せ！」

鬼海「はい。ほらこつちだ」

彩斗「離せ！離しやがれ！」

鬼海「静かにしないか（みぞおちにパンチを入れる）」

彩斗「ウグッ！ガハッ・・・くそ・・・」

鬼海に引きづり出される彩斗。

草刈「大丈夫か？ 絵夢」

絵夢「手荒な真似はしないでください」

草刈「手荒？何を言つてるんだ。お前は我が草刈画廊の大事な宝だ。指一本触れさせやしない。安心しろ」

絵夢「・・・・・」

草刈「ご来場の皆様、お騒がせいたしました。絵夢の成功をやつかんだ、たちの悪い不良が迷い込んできましたが、ご覧のとおり退治いたしました。ご心配なく心行くまで天才、蓮池絵夢の絵をお楽しみください。これより、感謝の意を込めまして乾杯をさせていただきます。紅蓮にちなんで真っ赤な赤ワインをご用意いたしました。用意はいいですか？本日は誠にありがとうございます！ 乾杯！」

来場者「乾杯！」

グラスを重ねる音。

拍手の喝采が画廊に響く。

◆その2

山道を歩く女装（？）した露霧と慧。

露霧N「俺たちは潜入調査のために、何年ぶりかも思い出せない女装をして山道を歩いて登つていた。生まれは女だから女装という表現は正しくないが、今は男として生きてるわけだから・・・かといつていつもの方が本当は男装で・・・あー、どっちでもいい！とにかく、山道は険しかった」

慧「おい、露霧・・・この道で合つてゐるのか？」

露霧「そのはずだけど・・・山道つて、どこも同じに見えるな」

慧「おい、恐ろしい事言うんじやねえよ」

露霧「タヌキにでも化かされてたりしてね、ははは・・・」

慧「まったくお前は、テキトーなんだからよ、ちゃんと確認してから」

露霧「おい、あれ！」

慧「なんだ？ 大狸でもいたか？」

露霧「馬鹿、違うよ、ほら、あれ！」

慧「わ、着いたー！」

露澤「ほらな、間違つてなかつただろ？」

慧「何がほらなだ！こんなに歩くなんて聞いてねえぞ」

露澤「まあまあ、無事到着したんだからいいじやねえか！行くぞ」

慧「あ、おい、待てよ！ちえ・・・あれ？露澤、車が来たぞ・・・わ！あぶねえ！ひき殺す気か！？」

露澤「おい、慧、大丈夫か！？」

車が止まり、鬼海が降りて来る。

露澤「おい、あんた！あぶねえじやねえか！危うく相棒が轢かれるところじゃつたぞ！」

鬼海「あん？なんだ、お前ら、道にでも迷つたのか？女の来るところじゃねえ、さつさと帰れ」

慧「そうはいかないんだよ」

鬼海「なぜだ？」

慧「呼ばれたからだよ」

鬼海「呼ばれた？ふざけるな。お前らみたいな場末のホステス呼んだ覚えはねえ」

慧「場末のホステスだと！？このチンピラ風情が！？」

鬼海「なんだと、この女（あま）！」

露澤「まあまあ、この山荘、豪内家の別荘だよね？」

鬼海「だつたらなんだ？」

露澤「じやあやつぱりここだ。俺たち、いや私たち、蓮池絵夢さんの依頼でここに呼ばれたんだよ。いるんだよね？蓮池さん」

鬼海「ふん、お前らに答える義理は無い。だいたい、蓮池絵夢がお前らを呼んだ証拠はあるのか？無いならさつさと帰れ。さもないと」

絵夢「僕が呼んだんだ」

鬼海「蓮池さん・・・」

慧「ほーらね」

鬼海「蓮池さん、この女たちを呼んだことは草刈さんは」

絵夢「話してある。構わないと言つてている。さ、こっちだよ、葉山さん、江口さん」

鬼海「こいつらはいつたい・・・」

絵夢「コンパニオンさんだよ。僕が依頼したんだ」

鬼海「依頼？もつとマシなのがいたでしよう？」

慧「何だと！？」

絵夢「レディに失礼でしよう。さ、行きましょう」

慧「それじや、お邪魔しまーす！ふん！」

露澤「べーだ！」

鬼海「チツ！ブスが」

露澤・慧「誰がブスじや！？」

・・・美術館の回想・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

露瀬 N 「あの日、美術館に飾られた紅蓮の絵の前で、蓮池絵夢は不思議な依頼をしてきた」

絵夢 「この絵をどう思う？」

露瀬 「え？この絵ですか……どうと言われても、上手だとは思いますが……それが何か？」

絵夢 「僕がなぜ、紅い睡蓮の絵を描き続けているか分かるかい？」

慧 「いいえ、まったく」

絵夢 「僕にはね、3つ違いの姉がいたんだ。5年前まではね」

露瀬 「5年前まで？お姉さんはどうかされたんですか？」

絵夢 「殺されたんだ」

慧 「殺された！？」

絵夢 「ああ」

露瀬 「なぜ殺されたんですか？犯人は？」

絵夢 「理由は分からない。犯人も捕まつていらない」

慧 「妙な話だな・・・」

絵夢 「僕の姉は池の中で発見された」

露瀬 「・・・溺死ですか？」

絵夢 「いや、胸を刺され出血多量で亡くなつた。凶器はパレットナイフ・・・」

慧 「パレットナイフ？絵を描くときに使うあれですか？」

絵夢 「ああ。先をとがらせた特別なものだつた。そして、その池にはたくさん蓮の花が咲き、池の水は・・・姉の血で真っ赤に染められていたんだ」

露瀬 「なんだつて・・・」

慧 「それでこんなに紅い睡蓮の絵を・・・」

絵夢 「あの時の池の紅い色が、僕の頭から離れなくなつた。むしろ時間を追うごとに鮮明になるようだ。まるで、姉が恨みを晴らして欲しいと言つてゐるようで、僕は・・・僕は・・・」

露瀬 「それで・・・俺たちに依頼つていうのは？」

慧 「突き止めるつて・・・心当たりでも？」

絵夢 「おそらく・・・近いうちに容疑者を全員集めることが出来るはずだ。その場所に立ち会い、誰が姉を殺したのかを突き止めてくれ」

露瀬 「突き止めてどうするんですか？」

絵夢 「犯人が分かつたら、警察に告発する」

露瀬 「本当ですね？必ず警察に任せますね？」

絵夢 「ああ、約束する」

露瀬 「・・・・・分かりました。お引き受けしましよう」

慧 「だけど、どうして俺たちに？」

絵夢 「女性なんじよ？本当は二人とも」

露瀬 「慧 「・・・・・」

絵夢「男性を呼んだのでは不審がられる。女性のコンパニオンに扮して潜入してください。その方が調査も動きやすいはずだ」

「……………女装ですか？」

露零〔……〕之、頃

露澤
一
・
・
・
・
いえ
頑張ります！

豪内家別荘。応接間。

豪内 「みなさん、良くおいで下さいました。疲れたでしよう？麓からはだいぶありますからね。ここは標高2000メートル以上です。早い年だと11月には初雪が降りますからね。だいぶ冷え込んできました。今夜あったりもしかしたら、降るかもしませんね」

草刈 「豪内さん、大勢で押しかけて申し訳

豪内「いえいえ、迷惑だなんて。嬉しいですよ。私も皆さんと喜びを分か
ち合えると思うと、とても幸せです」

草刈「それを聞いて安心しました。おまけに、蓮池絵夢の大作、紅蓮の連作32枚、全てを所有していただけなんて、光栄の極みです。重ねてお礼を言わせてください。本当にありがとうございます」

豪内 一そんな、草刈さん、頭をあけてください。こちらこそ、これから世界へ羽ばたくであろう若い才能にあふれた天才画家の代表作を所有させていただけたなんて感謝でいっぱいです。蓮池さん、本当にありがとうございます」「

絵夢「・・・いえ」

草刈一派いわい紅夢をひかへ。今り豪内さへ、緊張してゐたうごくして、

豪内 「いいんですよ。画家はキヤン

ませんか？草刈さん」

草木　おつしやる通りです

大いに語り合いましょう

糸杉 「お招きありがとうございます」

「すみません、輝馬さん、（）無理を言って」

糸杉 「いいよ、あんな切実な手紙をもらつたら来るしかないだろう?」

絵夢「ありがとうございます」

伊織 「あの！・・・僕なんか来て良かったんでしょうか？・・・ご連絡い
ただいて、嬉しさの余り何も考えず来てしまったんですが・・・すみませ
ん！やっぱり帰ります！」

絵夢 「いいんだ。いてくれ」

伊織 「でも・・・」

絵夢 「君は僕のファンなんだよね？」

伊織 「はい！もちろんです」

絵夢 「じやあファン代表として、このパーティに参加してくれ。おおいに

楽しんで、そして全てを見届けておくれ。頼むよ」

伊織 「絵夢さん・・・わかりました！僕、全力で楽しみます！」

絵夢 「ありがとう」

ドアが開いて、露霧と慧が酒を持って入ってくる。

露霧 「ではでは、まずはお近づきのしるしに一杯行きましょう！」

慧 「はい、みんなグラスを持ってー！まずはシャンパン、その後、ワイン！食後はブランデーでもウイスキーでも何でもあるわよー！さ、やりましょ、やりましょ！」

草刈 「（大きな咳払い）もう少し、品よくしてくれたまえ。いいね！」

露霧・慧 「はーい」

夕食後のリビング。

伊織 「雪だ！絵夢さん、雪が降つてますよ！」

豪内 「やはり。初雪だ、ああ、これは積もるかな」

糸杉 「大丈夫なんですか？積もつても」

豪内 「ああ、電機は自家発電だし、食料も10日分以上は備蓄があります。交通は途絶えますが、なに、心配はいりませんよ」

その時、突然、窓ガラスが割れる。

鬼海 「なんだ！？」

草刈 「何事だ！？鬼海！」

鬼海 「外を見てきます！」

出て行く鬼海。

糸杉 「この石が窓ガラスに当たつて割れたようだな」

伊織 「風で吹き飛ばされたんですかね？」

駆けこんでくる露霧たち。

露霧 「どうした！？」
慧 「大丈夫か！？」

戻ってくる鬼海。

草刈 「どうだ？」
鬼海 「外は異常ありません！」
草刈 「そうか。念のため、戸締りを確認しましょう」
豪内 「そうですね。そろそろお開きにしましようか。みなさんも長旅でお疲れでしょう。ゆっくりとおやすみください」

草刈 「鬼海、警戒を怠るなよ」
鬼海 「はい」

絵夢の部屋。
絵夢が入ってくる。

闇の中から彩斗が出てきて、絵夢にナイフを突きつける。

彩斗 「声を出すな。騒ぐと今すぐ首を搔つ切るぞ」
絵夢 「やはりお前か。居間のガラスを割ったのは、この部屋に忍び込むための陽動作戦だな。何しに来た？」

彩斗 「決まつてんだろう！ケリをつけに来たんだよ」
絵夢 「何のケリだ？」

彩斗 「ふざけるな！お前と草刈が結託して、罪を俺になすりつけ、二人でヨロシクやつてることのケリだよ！」

絵夢 「そんなことか」

彩斗 「そんなこと！？貴様、人の人生ボロクソにしておいて、言うに事欠いて、そんなことだと！？」

絵夢 「人生をボロクソにしたのはお前本人だろ」

彩斗 「じやあ、お前はどうなんだよ？俺と同じことをしたくせに、どうしてこうも行く末が違う？」

絵夢 「ボロクソだよ、お前以上に俺の人生はボロクソだ」

彩斗 「なんだと？・・・」

絵夢 「俺たちが馬鹿だつたんだよ。贋作なんか描いて」

彩斗 「それは草刈のやろうが！」

絵夢 「そうだとしても、やるべきじやなかつた！いや、やめるチャンスはいくらでもあつたはずだ・・・僕もお前も、初めは力試しのつもりで始めただけだつた。だけど、いつまでたつても、あいつに上手く騙されて、脅されて、洗脳され・・・気が付けば、俺たちは立派な贋作師に仕立て上げられていたんだ・・・」

彩斗 「だけどあいつは、贋作の噂が立つと、俺をマスコミに売りやがつた！天才贋作師なんてふれこみでよ。お蔭で俺は、二度とまともに絵を描くこ

とが出来なくなつちまつたんだ！それなのに・・・それなのに、どうしてお前だけがのうのうと大手を振つて絵を描き続けるんだよ！ふざけんじやねえぞ！手を出せ！二度と絵筆を持てねえよう、その右手を切り刻んでやる！さあ、手を出せ！」

絵夢「好きにしろよ」

彩斗「・・・なんだと？」

絵夢「好きにしろつて言つたんだ。俺はもう、絵を描く気はない」

彩斗「ふざけるな・・・騙そうたつてそれはいかない」

絵夢「嘘じやない。もう描く必要はないんだ」

彩斗「どうしてだ！？」

絵夢「お前、どうして俺が今だに、草刈の元で絵を描いているか分かるか？」

彩斗「・・・それは、画家として成功してえからだろ・・・」

絵夢「はははは」

彩斗「何がおかしい！」

絵夢「俺は、死んだ姉さんを殺した犯人を捜してるんだよ」

彩斗「なんだと！？」

絵夢「お前も知つてるだろ？姉さんは、俺に贋作を描くのをやめさせようとしてた」

彩斗「・・・・・」

絵夢「そうして・・・姉さんは、何者かに殺された」

彩斗「お前の姉貴をやつたのは草刈なのか？」

絵夢「分からない。そうかもしれないし、そうじやないかもしれない」
彩斗「・・・他にもいるのか？」
絵夢「ああ。可能性のある人間は、全員ここにいる」
彩斗「・・・そうか・・・わかつたよ・・・いいだろう、お前の話は信じてやる。だがな、俺はあいつだけは許さねえ！草刈の野郎だけはな」
絵夢「彩斗・・・」

◆その3 朝。絵夢の部屋。

露霧「思つた以上に降りましたね。これだけ積もつたら、簡単にはここから移動できないな・・・」

慧「なんせ、山の中の一軒家だもんな。ありやりや、携帯もつながらないぜ！ここで死んだら、見つけてもらうのにひどく時間かかりそうだな。おー、恐つ」

露霧「それでどうなんですか？」ここまで聞いた限りだと、やはり画商の草刈がお姉さん殺害の犯人に一番近いように思いますが。お姉さんはあなたがしてた贋作の仕事をやめさせようとしていた。それを邪魔に感じた草刈はお姉さんを殺した」

絵夢「ああ、僕も長い間そう思っていた。だからこそ、苦汁を飲んでも奴のそばから離れず、いつか証拠をつかみ追い詰めてやろうと、今日まで来たんだ」

慧「なるほどね。だけどなぜ今回、この山荘に来たんですか？他にも誰か疑わしい人間でも？」

絵夢「実は、あれから色々調べていたら新たに分かったことがある」

露霧「なんですか？」

絵夢「姉はころされる直前まで、豪内家で働いていたんだ。メイドとして」

露霧「なんですって？」

絵夢「そして、豪内家で働く姉を見始めた豪内世界は、姉に交際を申し込んだらしい」

慧「ありやー、つながつたなあ」

絵夢「しかし断られた豪内は力づくで姉を・・・」

露霧「マジか！？・・・ひでえ野郎だ」

絵夢「すでに画商として豪内家に出入りしていた草刈は、その事を知り、それを材料に豪内世界に近づいていった。そうしてお坊ちゃん育ちの豪内世界を徐々に取り込んでいったんだ」

慧「豪内にもお姉さん殺害の動機はあるわけか。自分のしたことがばれないように」

露霧「だけどどうしてわかつたんですか？お姉さんも人には知られたくなかつたでしよう？」

絵夢「昨日、輝馬さんと二人きりになつた時、彼が教えてくれたんだ」

慧「輝馬さんって、先輩画家の糸杉輝馬さん？」

絵夢「ああ」

露霧「だけど、糸杉さんがどうしてそれを？」

絵夢「輝馬さんと姉は、付き合つていたんだよ。もちろん僕もそれは知つていた。いつか輝馬さんは姉と結婚するもんだと思っていた。それなのにあんなことに・・・」

露霧「じやあ豪内とのことをお姉さんは糸杉さんに」

絵夢「そういうことになるかな・・・」

慧「せつない話だな・・・俺ちょっと外で煙草吸つてくる（ドアを開けると）、わ！なんだ、あんた・・・こんなところで何してる？」

鬼海が入つてくる。

鬼海「その話は本当か？」

慧「なんだあんた、盗み聞きか？でかい団体してやる」ことがせこいじやねえかよ」

鬼海「うるせえ、どけ！」

慧「痛て！何すんだ！？」

露霧「慧！やめろ」

鬼海「盗み聞きじやねえよ。これだ」

机の下の盗聴器を取る鬼海。

露霑 「盗聴器？」

鬼海 「ああ。草刈の命令で仕掛けさせてもらつた。昨日来たお友達との会話も聞かせてもらつたぜ」

絵夢 「草刈にはもう？」

鬼海 「いいや。まだ」

絵夢 「どうして？」

鬼海 「俺は草刈の野郎に金で雇われてはいるが、奴の事はあまり好きじやないんでね。いつか弱みでも握つて、形勢逆転のチヤンスをうかがつたわけよ」

露霑 「ゆする気か？」

鬼海 「ゆする？ ふん、交渉と言つてくれ。あくまでもビジネスライクな交渉つてやつだ」

絵夢 「どうやつて？」

鬼海 「どうやつてつて、どんな手を使つてもさ。あんたの姉さんを殺したのが草刈だろうと豪内だろうとどつちでも構いやしない。どちらかがゲロすれば、そいつからたんまり御代をいただくまでだ。どうだ？ 悪くない話だろ？ 俺が奴らを締め上げる。あんたは姉さんを殺した犯人を知ることが出来る。ウインウインつてやつだ。んふふふふ」

その時、大きな音と共に、豪内の叫び声が聞こえる。

豪内 「うわーーー！」

露霑 「なんだ！？」

慧 「行つてみよう！」

声の方に走り出る露霑たち。

階段を転げ落ち、動かない豪内を発見する。

露霑 「階段から落ちたのか！？」

慧 「こりやひでえな、首が明後日の方に捻じ曲がつちまつてる」

絵夢 「（歩み寄り）豪内・・・姉さんを殺したのはお前なのか？・・・答えろ・・・答えてくれよ、豪内・・・」

露霑 「どうやら、誰かに突き落とされたみたいだな」

鬼海 「突き落とされた？ なぜそう思う？」

露霑 「見てみろ、豪内はあおむけになつて階段を落下し、後頭部を強打している。そのせいで首が捻じ曲がつてしまつた。おそらく背後から誰かに呼び止められ、振り向いたところを突き飛ばされた」

鬼海「なるほどな。前向きに落ちたとしたら、うつ伏せで倒れている方が自然だな」

あわてた様子で駆けつける糸杉。

糸杉「どうしたんだ、何かあったのか？あ！・・・」

落ち着いた様子で現れる草刈。

草刈「どうした？」

鬼海「あ・・・豪内氏が階段から落下したようで・・・即死だつたようです」

草刈「・・・ そうか。仕方ないな」

慧「仕方ない？おいおい、あんた、人が一人死んだつていうのに何をのんきな」

絵夢「どうしてそんなに落ち着いてるんですか？豪内さんが死んだら、紅蓮は」

草刈「代金は昨夜、小切手でいただいてある。ほら、このとおり」

絵夢「いつの間に・・・」

糸杉「あんたつて人は・・・」

慧「ぬかりはねえつてことか」

露濬「金を手に入れたら彼を殺して、真相を闇に葬ろうつていうんですか？」

草刈「何だ、お前は？ホステスの分際で私にえらそうな口をきくな！」

慧「やめたやめた！もう、やめた」

露濬「俺たちはホステスでもコンパニオンでもありませんよ。探偵です。ある事件の真相を究明するためにここにきました」

草刈「ふん、そんな事だらうと思つていた。絵夢、お前の仕業だな。ある事件とはいつたいなんだ？ふざけるな！お前をここまでにしたのは誰だと思つてる！？のぼせ上がるなよ！お前など、私がいなければただの貧乏絵描きだつたんだぞ！この恩知らずめ！おい、鬼海！何をボーッとしてる、とにかく警察に電話だ。そこの電話を使え。携帯は繋がらん」

鬼海「はい・・・（何度も電話を掛ける）、繋がりません、電話線を切られてるようです」

草刈「なんだと！？」

露濬「閉じ込められたか」

慧「密室の山荘つてわけ？」

露濬「ああ」

糸杉「あれ？伊織君は？」

鬼海「あのガキ、どこ行きやがった・・・」

露濬「まさか、伊織君が豪内氏を？」

絵夢「探してくる」

糸杉 「絵夢！」

絵夢の後を追う輝馬。

慧 「俺たちも探そう」
露濬 「よし」

探しに行く露濬と慧。

鬼海 「草刈さん」

草刈 「なんだ？」

鬼海 「俺も悪だが、あんたは俺以上の悪党だな」

草刈 「なんだと？何が言いたい？」

鬼海 「聞きましたよ。あんた、若い画家を使って贋作で儲けてたんでしょう？」

草刈 「証拠はあるのか？」

鬼海 「証拠？ 贋作を描かされた本人たちがそう言つてるんだ。これ以上の証拠などないでしよう？ それに、マスコミが騒げば、きっとあんたが贋作を売りつけたオーナーたちが続々名乗りを上げるでしようね。草刈画廊の黒い贋作疑惑！なんて見出しどう。はつははははは！」

草刈 「きさま・・・」

鬼海 「それに、その事を知った絵夢の姉貴を口封じに殺したんだろう？」

草刈 「あれは！・・・私は人殺しなどしていない・・・あれは豪内氏が鬼海 「死人に口なしか。どちらが犯人でもかまわねえよ。あとは警察に任せせるさ。ククククク」

草刈 「・・・いくら欲しいんだ？」

鬼海 「1億。安いもんでしょう？ あんまり強つくばると、こっちまで殺されかねないからな。交渉成立、でいいですよね？ 草刈さん」

草刈 「・・・ああ」

鬼海 「それじやあとは、雪が解けるのを待ちますか。ふあ～、ちよつと部屋で昼寝でもしてきます。なんてたつて、こつちはご命令通り徹夜ですかね。眠いつたらねえや」

部屋に戻る鬼海。

草刈 「くつそう」

家中を探し回る露濬と慧。

露濬 「いなーなあ、もう家の外へ逃げ出しちやつたのかな」
慧 「この雪だぞ？ だけど、本当に伊織君が豪内を？」

露濬「さあな。だけどあの騒ぎで、あの場に来なかつたのは彼だけだから。こうは考えられないか？何らかの理由で、豪内が絵夢さんを苦しめているのを知つた伊織君は、階段付近で豪内氏と鉢合わせして、発作的に豪内を突き飛ばしてしまつた。そんなどころかな？」

慧「しょっぱい推理だな」

露濬「うるせえ、じやあ自分で考えろ！」

慧「わかつたわかつた。あとはこの部屋か」

露濬「ああ、入つてみよう」

部屋に入る露濬と慧。

慧「なんだここは？書斎か？」

露濬「どうやら豪内氏の執務室みたいだな。よし、ちょっと調べよう」

慧「調べる？何を？」

露濬「わかんないけど、絵夢さんのお姉さんとの関係につながるような何か」

慧「なるほど。じやあ俺はこつちを。なにに・・・難しそうな本ばつかりだな。本当に読んでるのかな？美術関係の本もすごい量だな、わ、重！う、うわっと！」

本を取り落す慧。

露濬「静かにやれよ、慧！」

慧「わりい、わりい・・・ん？本の間に写真が・・・うん？これ誰だうな？」

露濬「どれ？綺麗な人だな・・・もしかしてこれ、絵夢さんのお姉さんじや？」

慧「おお、それはあり得る！ いまだに写真を隠し持つてることは、そういうふう惚れてたつてことだな。よし、もつと探そうぜ！」

露濬「了解・・・おい、慧、これ」

慧「なんだ？なんかあつたか？」

露濬「日記だ。どれどれ・・・これが最後のページか、日付は・・・5年前か・・・おい、慧、これ！」

豪内N「今日、蓮池未宇さんが死んだ」

露濬「蓮池未宇？絵夢さんの姉さんの名前か！」

豪内N「どうして・・・なぜ？・・・驚きと悲しみで胸が張り裂けそうだ。どうやら何者かに胸を刺され、池の中に突き落とされて死んでいたそうだ。可愛そうに。優しくて美しい君の笑顔を僕は決して忘れない。僕のものにならなくていい・・・出来る事ならもう一度君に会いたい。未宇さん、安らかに。画家志望の弟さん、絵夢君と言つたかな。出来るだけ彼の応援

をしよう。心配しないで眠つておくれ。さようなら、愛する末宇・・・さようなら」

慧「驚いたな・・・」

露霧「この日記が本物なら、豪内氏が彼女を愛していたのは間違いなさそうだな」

慧「ああ。豪内氏の疑いは晴れたわけか」

露霧「じやあ犯人はやつぱり草刈か」

慧「この日記を突き付けて、白状させるか」

露霧「そうだな、認めるかどうかは分からなが」

慧「よし」

草刈の部屋に行く露霧と慧。

草刈の部屋。ノックの音。

草刈「誰だ？」

ドアが開き彩斗がナイフを手に入つてくる。

彩斗「俺だよ」

草刈「彩斗、貴様・・・」

彩斗「もう逃げらんねえぞ。ここは雪に閉じ込められた山の上だ。携帯も通じない。電話線は切つといたぜ」

草刈「お前の仕業だつたのか・・・」

彩斗「なあ、草刈さん、どうして俺たちを騙したんだ？」

草刈「お前らが馬鹿なだけだ。騙される方が悪いんだ」

彩斗「言つてくれるなあ、草刈さんよ。たしかに俺たちは馬鹿だつた。お前らには才能がある、俺の手で必ず売り出してやる。そのためにはまず完璧な模倣を習得しろ。生活の面倒は見てやるから・・・そういうあんたを俺たちは信じた。俺にもやつと運が回つてきた、そう思つたもんさ。だから言われるままに来る日も来る日も指定された絵を模写していく。あんたが贋作を本物と偽つて売りさばいでいるなんて知らないでな」

草刈「お前らだつてそのおかげで、何不自由ない生活が送れただろう。感謝されてもいいくらいだ」

彩斗「感謝？ああ、してるぜ、俺には絵の才能なんてこれっぽちもねえつてことを、早いところ気付かせてくれたことに對してはな。だがよ！・・・どうして責任を全部、俺におつかぶせたんだ？」

草刈「・・・私は知らない。マスコミが勝手に」

彩斗「嘘をつけ！お前が俺を売つたんだ！お前が俺の人生をめちゃくちやにしたんだ！俺は絵が描きたかった！売れなくてもいいから、自分の絵を

描き続けたかったんだ！それなのに、それなのに前の方で！この野郎ー！」

草刈 「やめろ！やめないか！グハツ！・・・このガキー・・・ガツ」

彩斗に胸を刺され倒れる草刈。

彩斗 「絵夢の姉ちゃんの恨みもこれで返したぜ。地獄に落ちな、草刈・・・」

草刈 「知らん・・・俺は・・・絵夢の姉など殺して・・・いない・・・」

彩斗 「・・・なんだと？」

ノックの音。

彩斗 「は！」

露濬 「草刈さん、少しお話いいですか？草刈さん？」

慧 「おかしいな？草刈さん？・・・入りますよ」

彩斗 「チツ！」

窓を割って、飛び降りて逃げる彩斗。

露濬 「なんだ！？」
慧 「ガラスの割れる音だ！おりや！（ドアを蹴破る）」

部屋に飛び込む露濬と慧。
草刈が胸を刺され倒れている。

露濬 「草刈さん！どうしたんだ！？」

草刈 「やられた・・・胸を刺された・・・ゴホツ！」

慧 「あちやー・・・かなり傷が深いな、肺にまで達してそうだ」

露濬 「誰にやられた！？護衛の鬼海か！？」

慧 「あの野郎、どういうつもりだ」

草刈 「ちがう・・・ゴホツ・・・私を刺したのは・・・うつ、うう！（絶

命する）」

露濬 「草刈！草刈！誰だ！？あんたを刺したのは誰なんだ！？」

慧 「（窓から見下ろし）おい、露濬！誰か逃げていくぞ」

露濬 「誰だ！？」

慧 「ん・・・わかんねえ」

鬼海が飛び込んでくる。

鬼海 「どうした！？草刈！」

慧「あ、犯人が！」

鬼海「何！（窓に近づき）……あのやろう、これじゃ1億円がパージやねえか！」

煙草を吸おうとする慧。ライターのガスが切れて火がつかない。

慧「あれ？クソ！このやろう……ちくしょう、ガスが切れた」

鬼海「ほらよ（ライターを投げてよこす）」

慧「あ、わりいね（煙草に火をつけて吸う）くー、うめえ」

露澤「だれなんだ？草刈をやつたやつは。あんた知つてるんだろう？」

鬼海「……虹来彩斗」

露澤「虹来彩斗？……たしか何年か前、天才賊作師とか言わされて一時、週刊誌やワイドショーで騒がれた奴じやないか？」

鬼海「ああ」

慧「なるほど、そいつも絵夢さんも草刈に賊作を描かされていたわけか。その恨みを晴らすため、この部屋に忍び来んで草刈を殺害した」

露澤「これまで未宇さん殺しの有力な容疑者一人が死んじまつた。いつたいどつちなんだ、本当の犯人は……」

鬼海「それだがな、草刈の野郎は、自分はやつてないって言つてたぜ。豪内がやつたって」

露澤「え？おかしいな」

鬼海「どうかしたか？」

露澤「豪内氏の部屋で彼が5年前に書いた日記を発見したんだ。そこには、未宇さん、絵夢さんのお姉さんの死に対しての、追悼の思いが描かれていた」

慧「あれは嘘じやないと思うぜ。豪内は犯人じやない」

鬼海「じやあどつちかが嘘をついてんだろ？もう、どうでもいいんだよ、そんなことは！俺の報酬は誰が払ってくれるんだ！？おい、てめえ、死んでねえで約束の1億円払え！ふざけやがつて、このやろう！」

露澤「やめろよ、死人を冒涜するんじや……おい、なんだ？この煙……」

鬼海「あん？馬鹿みてえに煙草ばつか吸つてるからだろ？が、換気しろ、換気！ん？廊下から？」

ドアを開ける慧。

慧「やつべ！火事だ！廊下の向こうは火の海だぞ！」

露澤「なんだつて！？」

雪が静かに降り続いている。彩斗が来る。

彩斗 「絵夢」

絵夢 「彩斗・・・上手くいったのかい？」

彩斗 「ああ・・・結局やつは、一度も謝りはしなかつたけどな」

絵夢 「そうか・・・これからどうするんだ？」

彩斗 「別に・・・どうなつてもいいさ。もう思い残すことはない」

絵夢 「・・・死ぬつもりか？」

彩斗 「死ねるならな」

伊織が現れる。

伊織 「絵夢さん」

絵夢 「ああ、伊織君、来たね」

彩斗 「よう、ファンクラブ会長。無事だつたか」

伊織 「はい。さつきまで地下室に隠れてました」

絵夢 「悪かつたね。君にも色々な思いをさせてしまった。許してくれ」

伊織 「そんな！・・・こうして絵夢さんの役に立てただけで僕・・・生きてる甲斐がありました・・・僕は、絵夢さんの紅蓮に漂う死の香りに魅せられてしまいました。だからあのまま町で暮らしていたら、いつか理由もなく人を殺してしまう気がして怖かったんです・・・」

・・・だけど絵夢さんにここに連れて来てもらつて、ちゃんと意味のある殺人を、絵夢さんのためになる人殺しをすることが出来ました。本当にありがとうございました

絵夢 「ありがとうございます。こちらこそ感謝してる。豪内は何か言つていたかい？」

伊織 「はい。私は末宇さんを殺してなどいない・・・彼を階段から突き飛ばした後、問いただすと死の間際、そう言つていました」

絵夢 「・・・そうか」

彩斗 「草刈の野郎も、自分じゃないと言つてたぜ」

絵夢 「・・・そうか」

彩斗 「まあどちらでもいいか。二人とも殺したんだし。これで良かつたんだな？」

絵夢 「・・・ああ」

伊織 「あの、彩斗さん？」

彩斗 「なんだ？」

伊織 「死ぬんだつたら、僕も連れて行ってください」

彩斗 「本気かよ？」

伊織 「はい・・・僕みたいな人間はいないほうがいいんだ・・・そうじやない」と僕はきっとまたいつか・・・いつか・・・」

彩斗 「・・・わかつたよ、行こう」

伊織 「・・・はい」

彩斗「じゃあな、絵夢。地獄で待ってるぜ」

伊織「きようなら、絵夢さん……紅蓮……大好きでした……さようなら」

絵夢「……さようなら」

彩斗「おい、あれ」

伊織「山荘が燃えてる」

一気に火の手が上がり、燃え上がる山荘。外に逃げようとする露濬たち。

鬼海「くそ！なんだつて火事になんか！」

露濬「ガソリンの匂いだ！何者かが発電用のガソリンを撒いて火を点けたんだ！」

慧「ゲホッゲホッ……おい、こっちだ、こっち……あ」

露濬「止まるなよ、慧！どうした！？」

慧「誰かいる……」

鬼海「なんだと！？」

露濬「……糸杉さん？」

火の中に飛び込んでくる絵夢。

絵夢「輝馬さん！？」

糸杉「……絵夢……すまない……」

絵夢「どうしたんですか？輝馬さん……あなたが……火を？」

糸杉「……ああ……絵夢、本当にすまない……」

絵夢「輝馬さん、何を謝ってるんですか？逃げてください！」のままじや

糸杉「いいんだ……もういいんだ……」

絵夢「何がいいんですか！？輝馬さん、何がいいっていうんですか？……

教えてください」

糸杉「……

絵夢「……姉さんのことですか？」

糸杉「……そうだ」

絵夢「……もしかして……姉さんの死について……何か知ってるんですか？」

糸杉「……俺は……俺は！」

絵夢「まさか……輝馬さん……あなたが……」

糸杉「許してくれ、絵夢……俺は、あいつを……未宇を守つてやる」とが出来なかつた……」

絵夢「守る？……どういう事ですか？」

糸杉「未宇は……あの時、未宇のお腹の中には……赤ん坊がいたんだ……」

絵夢「なんだつて！？」

糸杉「……俺はあの頃……まったく絵に買い手がつかない、売れない貧乏画家だった……だけど未宇は、それでもいいと言つてくれた……このまま売れなくとも、自分が働くから大丈夫、輝馬は自分の描きたい絵を描き続けてつて、いつも俺を励ましてくれていたんだ……それなのに俺は……」

絵夢「……どうしたんですか？」

糸杉「……どうしても諦められなかつた……自分の夢を捨てきれなかつた、自分の手で未宇を幸せにしたかった……だから俺は……金持ちのパトロンの誘いを受けたんだ」

絵夢「パトロンの誘い？……誰かに援助をしてもらつたんですか？」

糸杉「そうだ……しかし金を受け取るかわりに、俺はその金持ち女と……寝たのさ……」

絵夢「輝馬さん……」

糸杉「気が付いた時には、俺は画家どころじやない、金持ちババアに金で飼いならされた情夫に成り下がつていたんだよ！あははははは……最悪だろ？」

絵夢「そんな……」

糸杉「ところがある日、未宇からお腹に子供がいることを打ち明けられた。俺は本当はこう言つてやりたかった……ありがとう、一人で頑張つて行こう、いいや、お腹の子供もいれて3人で生きて行こうつて……だけど俺はその時、こう言つたんだ……今は結婚できない、おろしてくれつて……」

絵夢「そんな……」

糸杉「俺は自信が無かつた……女にもらう金でからうじて絵を描き続ける自分が、家族を守つて行けるわけがない、そう思つてしまつたんだ……そう思つたら怖くて怖くて……だから……だから……」

絵夢「嘘だろ？……あんた……輝馬さん！……嘘だつて言つてくれよ……」

糸杉「しばらくして、未宇が言つたんだ……他に女の人がいるからよねつて……」

絵夢「姉さんは……知つてたのか？」

糸杉「ああ……パトロンの女が未宇に教えてたんだ。俺と女の醜い関係を……許してくれ、絵夢……」

絵夢「ふざけるな！それで姉さんを殺したのか！？邪魔になつたから姉さんを殺したんだな！？そなんだろ！？この野郎……殺してやる！」

糸杉「自殺したんだ」

絵夢「……え？」

糸杉「……未宇は……事実を知つた未宇は、自分で自分の胸を俺のパレットナイフで刺して……自殺した……」

絵夢 「自殺・・・姉さんが自殺・・・嘘だ・・・嘘だ！」

糸杉 「・・・たぶんあいつは・・・最後に賭けをしたんだよ」

絵夢 「・・・賭け？」

糸杉 「ああ・・・全てを聞かされてもなお、俺の事を信じたくて・・・だからおなかの子供の事を打ち明けた・・・だが俺は・・・あいつを裏切ったんだ・・・」

絵夢 「じやあ、僕は今までなにを・・・なにを・・・うわー！」

音を立てて、天井が崩れ始める。

慧 「天井が崩れる！」

鬼海 「やべえ！逃げるぞ！」

露濬 「来るんだ、絵夢さん！・・・絵夢さん！」

狂つたように叫び続ける絵夢を、外に引っ張り出す露濬。

糸杉 「絵夢！」

絵夢 「・・・」

糸杉 「すまなかつた・・・だけどお前の絵は本物だ・・・書き続けてくれ・・・

頼む・・・あいつが望んでたように・・・

鬼海 「崩れるぞ！」

大きな音と共に、崩れ落ちていく山荘。

絵夢 「・・・馬鹿野郎・・・馬鹿野郎・・・」

◆その5 警察の取り調べ室。

鹿島 「蓮池さん、つまり今回、雪の山荘で起きた2件の殺人は、あなたがあの二人に頼んで行わせた犯行ということで、間違いないんですね？」

絵夢 「はい、間違いありません」

鹿島 「そうすると殺人教唆という事で、実行犯より罪は重くなる、わかるんでしようね？」

絵夢 「ええ、わかっています」

鹿島 「(ため息)・・・まず第一の殺人の被害者は豪内世界。姉の未宇さんには横恋慕した豪内が、嫉妬の余り未宇さんを殺したと考え、自分の絵のファンである猫間伊織に豪内殺害を依頼した。間違いないか？」

絵夢 「間違いません」

鹿島 「次に、第二の殺人の被害者は画商の草刈礼音、こちらは草刈主導による贋作の制作販売の事実を、未宇さんに暴露されそうになつたと思つた

草刈が未宇さんを殺害したと考え、共に贋作を描かされていた虹来彩斗に草刈殺害を依頼した。間違いないか？」

絵夢「はい、間違いありません」

鹿島「うーん、どうも釈然としないんだが、本当はどっちが姉さん殺しの犯人だつたんだ？教えてくれ」

絵夢「わかりません」

鹿島「うそつけ。分からぬままだとしたら、他に真犯人がいるかも知れないだろうが？ そうなら、再捜査を始めなきやならん。違うか？」

絵夢「もういいんです。すべて僕が悪いんです」

鹿島「んー・・・チツ、はあ・・・」

取調室。次の日の取り調べ。

鹿島「虹来彩斗、お前が草刈を殺したんだな？」

彩斗「はい」

鹿島「いくら友達だからって、頼まれて殺人なんかするか？ 頭がどうかしてるんじゃないか？」

彩斗「頼まれてなどいません。俺は俺の恨みを晴らすために、あいつを殺したんです」

鹿島「そうなの？ 面倒くせえな、殺人教唆による依頼殺人の線で話まとめてるのによ。なんで2人してわざわざ重い罪になるような供述するんだよ」

彩斗「絵夢がそう言つてるんですか？」

鹿島「ああ、お前がやつた殺人は、お前の意志じやなく、自分が頼んだんだって言つてやがる。どっちなんだ？ 本当は」

彩斗「頼まれてなどいません。あいつは今回の殺人にはまったく関係ありません。信じてください、刑事さん」

鹿島「やれやれ・・・」

同じ日の午後の取り調べ。

鹿島「いい加減にしろ！ お前まで頼まれてねえっていうのか！？」

伊織「はい。頼まれてなどいません」

鹿島「じやあどうして豪内を殺したんだ？ 動機は何だ？ お前と豪内は赤の他人だろうが？」

伊織「僕は誰かを殺してみたかったんです。僕の部屋は捜査しましたか？」

鹿島「ああ、家宅捜査はした」

伊織「それじや、見たんですね？ 色々と」

鹿島「見たよ・・・まったく、殺人願望の塊みたいな部屋で、ぞつとしたぜ。残虐なスプラッター映画や、パソコンのフォルダーには死体の写真がわんさか入つてた。可愛い顔して、お前は悪魔か？」

伊織「ありがとうございます。最高の褒め言葉です」

鹿島 「褒めてねえよ！まったく・・・だがどうして、蓮池絵夢の絵が好きなんだ？特に、紅蓮だつて？うまいとは思うが、なんだか気分が悪くなる絵だけどな、俺からしたら」

伊織 「紅蓮は残酷で、それでいて悲しくて美しい・・・僕の罪深い衝動をそのまま絵にしたような、そんな作品に思えるんです・・・紅蓮は死の花・・・」

鹿島 「なんだつて？」

更に絵夢の取り調べ。

鹿島 「だけど、どうして3人一緒に自首してきたんだ？」

絵夢 「たぶん・・・死ねなかつたからです」

美術館。3人の靴音が響いている。

鬼海 「なあ、うちに来いって。悪いようにはしねえからよ」

露霧 「やめろよ、こんなところまで着いてきやがつて。今度の事で、あらためて芸術に目覚めてみようとしてるのによ」

鬼海 「そういうなよ、俺のとこも今、人材不足でよ。お前らみたいな生きがいいのがちようど欲しかつたんだ。いきなり幹部からスタートだ！な？それならいいだろ？」

慧 「幹部？本当に？」

露霧 「馬鹿、慧！嘘だよ嘘！」

係員 「館内ではお静かに！」

露霧 「ほら、怒られたじやねえかよ！美術館だぞ、お静かに！」

鬼海 「静かにしたら聞いてくれるのか？」

慧 「だめー！」

鬼海 「駄目かー、こんなに頼んでも？」

露霧 「ダメダメ、誰がヤクザなんかになるかつての、なー？」

慧 「そうそう、だいたい流行らねえんだよ、女の子にもてなくなつちやうつつーの！」

鬼海 「馬鹿野郎、俺のところはヤクザなんかじやねえぞ！マフィアだ、マフィア！」

露霧 「一緒だらうが」

慧 「あほか」

鬼海 「あ、そう！あーわかつたよ、もう頼まねえ！そのかわり、てめえら覚悟しろよ？裏の世界にデマばらまいて、仕事出来ねえようにしてやるぜ、ザマアミロ！わははははは！」

露霧 「わ、きつたねー！職権乱用！営業妨害だ！」

慧 「そうだそうだ！社会のルールは守りましよう！」

鬼海 「うるせえ、うるせえ！ヤクザにルールがあつてたまるか！？」

露霧 「やつぱりヤクザなんじやねえかよ！」

鬼海 「いや、それはだなあ」

鹿島 「なんだ？ルールを守れないのはどこのどいつだ？」

鬼海 「何だと！？外野はひつこんでる」

鹿島 「誰が外野だ？署内の野球チームじや、俺は4番でピッチャーダぞ」

鬼海 「あ、鹿島！・・・警部」

鹿島 「よう、鬼海、あいからずだな」

鬼海 「ちつ！邪魔が入つたぜ・・・おい、兄弟、この話の続きをまた今度だ」

鹿島 「勝手に兄弟にするな！」

鬼海 「俺は諦めねえぞ。鹿島さん、失礼します」

帰つていく鬼海。

慧 「勝手に兄弟にするな！」

鹿島 「おう、次は取調室で会おうな。がはははは・・・ところで露濬」

露濬 「・・・はい？」

鹿島 「知つてるんだろう？」

露濬 「何をですか？」

鹿島 「とぼけんじやねえよ、山荘での殺人事件の真相だよ。見てたんだろ？二つも殺しがあつて、焼けた山荘の中からは別の遺体まで発見された。そこにお前らがいたわけだ。全部話せ。このままじや話がとつちらかつてて公判が維持できん」

露濬 「・・・話せませんよ」

鹿島 「なんだ？どういう意味だ」

露濬 「話せないと言つたんです。俺たちは探偵ですよ。依頼主が話したくないつて言うなら、何があつても俺たちは話しません」

鹿島 「露濬、てめえ」

慧 「守秘義務ですよ。誰にだつて知られたくない秘密はあるでしょ？」

露濬 「聞きましたよ、鹿島さん。この間の焼肉屋の領収書、経理に頼み込んで接待費で落としたでしょ？いいんですか？同席してたのが俺たちなのにそんなことして。それとも、やつぱりあるんですか？裏帳簿」

鹿島 「わ、馬鹿、あれはだな、市民との親睦を兼ねて・・・てめえら、結

局ただで焼き肉食つたくせに、警察を脅すとはいひ度胸だな・・・」

露濬 「脅す？やめてくださいよ、交渉ですよ、交渉」

慧 「そうそう、ビジネスライクにいきましょう、ビジネスライクに」

露濬 「じや、ま、そういう事で。失礼します。行こうぜ」

慧 「ばいばーい！また親睦の方、宜しくねー！」

露濬・慧 「(笑)」

笑いながら去つていく露濬と慧。

鹿島 「くそ、このやろう・・・覚えてろよ、露濬ー！」